

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第9次調査概報

黒川岸天遺跡

2004年3月

上市町教育委員会

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第9次調査概報

黒川岸天遺跡

2004年3月

上市町教育委員会



1.露岩3上面 2.露岩3侧面



1.露岩3側面の加工痕 2.岩屋

序

上市町では、平成6年に下水道管理用道路敷設に伴う発掘調査で、12世紀末から14世紀までの中世墳丘墓群を調査しました。この遺跡が黒川上山古墓群であり、完全な形で今に残る全国でも稀な遺跡であることが判明しました。町ではその重要性から道路の方線変更を行い、全面的に遺跡を保存し、同年12月には上市町指定史跡として後世に残すことにいたしました。

上市町教育委員会ではこの遺跡を次代に残すため保存整備をする予定ですが、その資料作成のための発掘調査を平成8年度より国庫補助を得て計画的に行っております。

前回までの調査で、黒川上山古墓群からは12世紀後半から15世紀に及ぶ埋葬施設67基が確認され、黒川塚跡東遺跡では古墓群よりやや古い6基の墳丘墓及び寺院あるいは僧坊跡と考えられる施設群、伝承真興寺跡では本格的な伽藍配置を有する山林寺院、日枝神社裏遺跡では僧坊跡と想定される遺構群、円念寺山遺跡では全国屈指の大規模経塚群というように、古代～中世の各種の宗教遺跡がこの黒川の地に密集していることが明らかになってきました。中でも円念寺山遺跡の経塚埋納品はその貴重さと重要性から全国的にも注目を集め、またその内容からは付近一帯が中世の一大靈場であったことがさらに明確になったばかりか、鶴岳・立山を中心とする広義の立山信仰にも関連する遺跡群であったという可能性が示されました。また、これらの調査に並行して実施してきた分布調査では、黒川地区から護摩堂地区にかけての谷沿いにはこの遺跡群と一体のものとして捉えうる大小様々な平坦面群が濃密に分布していることが明らかとなり、昨年度には護摩堂村巻遺跡・護摩堂曲戸遺跡の発掘調査を実施しました。調査では寺院あるいは僧坊跡と考えられる広大な平坦面群、大型の塚状地形を確認しています。

今年度の調査では、平成13年度の分布調査で確認した「黒川岸天遺跡」を対象とした発掘調査を実施しました。この地は昨年度に調査した護摩堂地区と黒川との地境にあたる重要な場所といえます。調査では、造成された平坦面や人為的な加工痕が多く残る巨岩などを確認しました。

調査は平成15年8月から平成16年3月にかけて実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るようとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご指導をいただきました文化庁文化財部記念物課、富山県文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山考古学会、黒川地区のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成16年3月

上市町教育委員会

例　　言

1. 本書は富山県中新川郡上市町黒川地区内に所在する黒川岸大遺跡^{（かろいし）}の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成15年8月19日から平成16年3月31日までの延べ56日間で実施した。分布調査は富山大学人文学部考古学研究室の協力を得て、平成15年11月22日から同24日までの3日間で行った。
3. 調査対象面積は約8,000m²で、実際に掘削を行ったのはそのうち約450m²である。
4. 調査は、国庫補助金、県費補助金を得て上市町教育委員会が実施した。
5. 調査事務局は上市町教育委員会におき、調査期間中、文化庁文化財部記念物課、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターの指導を受けた。事務及び調査担当は、教育委員会事務局長代理・文化振興係長高慶孝と同主事三浦知徳がこれにあたり、教育委員会事務局長 善内昭悦が総括した。
6. 遺物の整理、本書の編集、執筆は高慶・三浦が行った。遺物の実測・トレイスは調査担当が中心となり、後述する整理作業員が行った。
7. 調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義なご指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意をしたい。
上市町黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会委員各位、富山大学人文学部教授 黒崎直、日本考古学协会会员
刈谷俊介、橋本正春、黒川区長 伊藤勝保、西種区長 稲垣忠一（順不同・敬称略）
8. 調査参加者は次のとおりである。
発掘調査参加者：遠藤司洋、小林高太、関根章義、細田隆博、前田尚美、間野達（以上富山大学学生）、
荒木智恵子、岩城秀子、大沢邦子、大沢富了、金子みつみ、川上富美子、酒井栄子、酒井文子、澤井新三、
善内みき子、高城英子、高城富美子、中川セツ、早崎秋子、藤田一枝、松本純一、青田江美子
分布調査参加者：池田ひろ子、荒原雄大、黒田佳恵、小林高太、高橋彰則、舛谷史章（以上富山大学学生）
整理作業員：久保浩一郎、坂野井絵里、阪英子、前田尚美（以上富山大学学生）、川上藍、城戸幾久子、
善内みき子、若木幸子

目 次

I	遺跡の環境	1
II	調査に至る経過	3
III	調査の経過	3
IV	調査結果	4
1.	遺構	4
2.	遺物	9
3.	分布調査	10
V	まとめ	10
引用・参考文献		11

図

第1図	地形と周辺の遺跡 (1/50,000)	2
第2図	遺跡周辺図 (1/5,000)	5
第3図	遺構全体図 (1/400)	12
第4図	第1・2トレンチ実測図 (1/80)	14
第5図	第3トレンチ・墳丘状遺構実測図 (1/80)	15
第6図	露岩群実測図 (1/200)	16
第7図	露岩3実測図 (1/80)	18
第8図	岩屋実測図 (1/80)	20
第9図	分布調査「武家屋敷」伝承地実測図 (1/800)	23
第10図	周辺周辺遺跡分布図 (1/25,000)	24

図版4	遺構写真 (遺跡遠景、第1トレンチ)
図版5	遺構写真 (第2・3トレンチ)
図版6	遺構写真 (墳丘状遺構、露岩1)
図版7	遺構写真 (露岩2)
図版8	遺構写真 (露岩3)
図版9	遺構写真 (露岩3)
図版10	遺構写真 (露岩3)
図版11	遺構写真 (露岩4・5)
図版12	遺構写真 (露岩6・7・8)
図版13	遺構写真 (露岩9・10)
図版14	遺構写真 (岩屋)
図版15	遺構写真 (岩層・岩屋背後斜面)
図版16	遺構写真 (岩屋背後斜面)
図版17	遺構写真 (調査風景)
図版18	遺構写真 (分布調査)

図 版

図版1	周辺航空写真
図版2	遺物実測図
図版3	遺物実測図

図版19	遺物写真
------	------

図版20	遺物写真
------	------

I 遺跡の環境

上市町黒川岸天造跡は、富山県中新川郡上市町黒川地内に所在する（第1図・第2図・図版1）。上市町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西にのびる町である。西は県都富山市、北は滑川市、南は立山町に接し、東側は標高2,998mの剣岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。

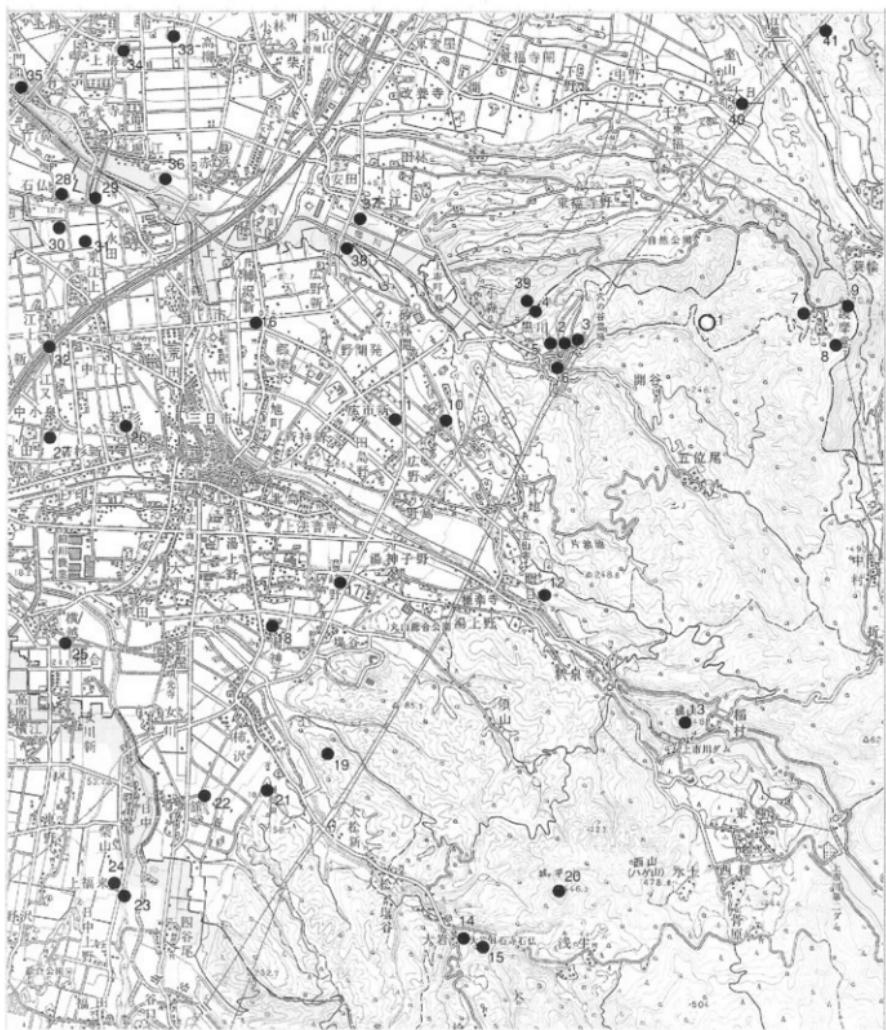
黒川岸天造跡は、平成13年度に実施した分布調査で発見した遺跡である。全国名水百選にも選定された「穴の谷涌水」で広く知られる黒川地区の東端山中に位置し、昨年度に調査を実施した弘法大師ゆかりの地・談摩堂地区との境界にあたる。遺跡は標高約160～200mの山腹に立地し、林立する巨岩群とそれらの間に広がる平坦面群からなる。これらの巨岩群は概ね指先大の流紋岩・安山岩等を取り込んだ軟質の角礫凝灰岩からなり、中新生中期の海成層である八尾累層中位の福平火碎岩層に由来するものと考えられる。なお、本遺跡の立地する山地もこの層と考えられる岩石で形成されているようで、山中の所々で確認できる露頭では風雨にさらされて滑らかになった岩肌を覗かせている。

遺跡直下の沢沿いにはかつては黒川・談摩堂を結ぶ往来であった古道があり、「弘法大師の足跡岩」と称される岩が置かれた開削面もある。また地元の方々の話によると、この辺りに数多く認められる巨大な露岩群の一部は、古くより「仏岩（ほけいわ）」と呼びならわされていたとのことである。こうした伝承は、この地が黒川地区の中世宗教遺跡群（経塚・墓・寺院・僧坊等）と密接に関わる、あるいは一体のものであったことを推測させる。

町内及び周辺の古代から中世に至る宗教関係遺跡としては、市街地の南東に真言宗大岩山口石寺がある。この寺院は北陸有数の真言寺院で、開基は奈良時代まで遡るといわれ、本尊は磨崖佛の不動明王（国指定重要文化財）である。その裏山の京ヶ峰山頂には銅板製經筒及び外容器（珠洲壺）、銅鏡などが出土した大岩京ヶ峰經塚（12世紀後半）がある。また、市街地の東には曹洞宗の眼目山立山寺、南の立山町には日中正橋經塚、日中東經塚がある。これら中世宗教遺跡のパックボーンをなすのが、文献上古代から中世に登場する堀江保・小森保あるいは堀江莊に開述するとみられる遺跡（江上B遺跡・東江上遺跡・上梅沢町遺跡・本江馬場田遺跡・横越遺跡など）、南北朝期から戦国時代まで中新川一帯に勢力のあった上肥氏をはじめとする豪族の城や居館跡（護摩堂城跡・稻村城跡・郷柿沢館跡・柿沢城跡・茗荷谷山城跡・郷田砦・弓庄城跡・千石山城跡・有金城跡・堀江城跡・堀の内城跡など）であり、これらの遺跡との関わりの中でその消長があったものと考えたい。このことから、平野部の遺跡との関連、山間部の城や寺院との関連も十分視野に入れると共に、密教における山岳信仰のあり方を十分に考慮に入れた調査が必要であり、中新川地区全体の中世遺跡の詳細な検討が必要である。

II 調査に至る経過

上市町黒川地内では、平成5年度に農業集落排水事業の管理用道路が計画され、当該地区に所在する上山古墓群の、事前発掘調査が行われた。調査の結果、本遺跡が全国でも少ない中世墳丘墓群で、墓数も40基を上回るきわめて良好な遺跡であることが明らかとなった。上市町教育委員会は上級機関の指導のもと、県文化財保護審議委員濱畠氏（故人）・奈良大学学長（当時）水野正好氏に現地視察をお願いし、保存に関する意見をいただいた。この意見を元に、町当局と再度協議、地元黒川地区からの保存要請もあり、全面保存を合意した。その後同地内は平成6年12月8日町指定史跡として指定され、平成7年度には公有地化も図られた。平成8年度から国庫補助金・県費補助金を得て黒川上山古墓群の保存と一般公開のための資料収集を目的とする周辺調査を行っており、今年度で第9次調査となる。



第1図 地形と周辺の遺跡(縮尺 1/50,000)

- 1.黒川岸天遺跡
- 2.黒川上山古墓群
- 3.黒川塚跡東遺跡
- 4.伝承真興寺跡
- 5.日枝神社裏遺跡
- 6.黒川円念寺山遺跡
- 7.護摩堂曲戸遺跡
- 8.護摩堂村巻遺跡
- 9.護摩堂城跡
- 10.広野D遺跡
- 11.広野C遺跡
- 12.駁目山旧開山堂遺跡
- 13.稻村山城跡
- 14.大岩日寺石磨崖佛
- 15.大岩京ヶ峰経塚
- 16.郷柿沢船跡
- 17.湯崎野西遺跡
- 18.湯神子B遺跡
- 19.柿沢城跡
- 20.若荷谷山城跡
- 21.郷田砦跡
- 22.弓庄城跡
- 23.日中玉橋経塚
- 24.日中東経塚
- 25.横越遺跡
- 26.若杉神田遺跡
- 27.中小泉東遺跡
- 28.石仏遺跡
- 29.石仮塙町遺跡
- 30.石仮南遺跡
- 31.大水田西遺跡
- 32.江上B遺跡
- 33.上梅沢町遺跡
- 34.下梅沢遺跡
- 35.金城跡
- 36.堀江城跡
- 37.本江馬場田遺跡
- 38.金助山砦跡
- 39.小森館跡
- 40.屋の内城跡
- 41.木尾南城跡

III 調査の経過

第1次調査（平成6年度本調査）黒川上山古墓群

調査期間：平成6年5月13日から同年7月27日（延べ72日間）。調査対象：1,500m²。遺構：墳丘墓19基など。遺物：珠洲焼骨器、土師質皿など。年代：13世紀代。その他：調査地区以外の部分においても16基以上の墳丘が確認され、全体で39基以上の墳墓が存在していることが明らかとなった。

平成6年度試掘調査 黒川塚跡東遺跡

調査期間：平成6年9月9日から9月22日（延べ11日間）。対象対象：古墓群東側の山林約5,000m²。道路方線の変更に伴う事前の試掘調査。その他：県補助金を受けて実施した。

第2次調査（平成8年度本調査）黒川上山古墓群

調査期間：平成8年11月7日から同年12月17日（延べ25日間）。調査対象：約1,500m²。遺構：墳丘・集石・五輪塔など45カ所の埋葬施設。遺物：珠洲焼の骨器・輸入磁器・土師質皿、五輪塔6カ所。その他：1次調査を含め全体で70カ所の埋葬施設を持つ墓群であることが明らかとなった。

第3次調査（平成9年度本調査）黒川塚跡東遺跡

調査期間：平成9年8月21日から同年10月7日（延べ32日間）。調査対象：古墓群東側平坦面、約5,500m²。遺構：墳丘墓6基、平坦面10、掘立柱建物1、石列1、礎石跡5、石垣遺構1カ所、参道なしし墓道1カ所。遺物：8世紀から12世紀までの須恵器片多数、織紋土器、攻玉製品など。

第4次調査（平成10年度本調査）伝承 真興寺跡

調査期間：平成10年10月8日から同年12月28日（延べ33日間）。調査対象：旧真興寺跡と伝承のある平坦面約3,200m²。遺構：本堂跡・塔跡・堂跡などの基壇・礎石・盛土状遺構・池・石敷・山門の石段と石垣・湧水地・横穴など。遺物：土師質皿、須恵器、珠洲焼、越中瀬戸、唐津など。年代：9世紀から18世紀。その他：黒川地区山中の分布調査を行い、大小様々な平坦面を確認した。

第5次調査（平成11年度本調査）伝承 真興寺跡

調査期間：平成11年9月27日から平成12年3月31日（延べ89日間）。調査対象：真興寺跡の再調査、本堂及びその周辺調査。その他：周辺と開谷地区的分布調査及び簡易測量を実施した。

第6次調査（平成12年度本調査）日枝神社裏遺跡・円念寺山遺跡

調査期間：平成12年6月12日から平成13年3月31日（延べ56日間）。調査対象：日枝神社裏の平坦面及び字名、舟ノ谷（円念寺山と呼ばれる）の試掘調査1,500m²。遺構：造成平坦面・土壠・集石など。遺物：珠洲、土師質皿、短刀など。その他：穴の谷豈場周辺の分布調査・簡易測量を実施。

第7次調査（平成13年度本調査）円念寺山遺跡

調査期間：平成13年6月12日から平成14年3月31日（延べ60日間）。調査対象：黒川字舟ノ谷約2,000m²。遺構：石櫓1、集石1、經塚23カ所、塚14カ所。遺物：珠洲（經筒外容器）、青白磁、独鉛杵、磬、短刀など金属製品。その他：護摩堂周辺地区分布調査及び簡易測量実施。

第8次調査（平成14年度本調査）護摩堂村巻遺跡・護摩堂曲戸遺跡

調査期間：平成14年7月4日から平成15年3月31日（延べ69日間）。調査対象：護摩堂字村巻及び曲戸の試掘調査約14,000m²。遺構：平坦面・土壠・石墨状集石・集石・通路跡等。遺物：珠洲、越中瀬戸、唐津、伊万里。その他：片地谷周辺地区分布調査実施。

第9次調査（平成15年度本調査） 黒川岸天遺跡

調査期間：平成15年8月19日から平成16年3月31日（延べ56日間）。調査対象：黒川字岸天地内約8,000m²。遺構：平坦面、露岩、集石、岩屋等。遺物：二次加工痕のある石材。その他：西種園地区分布調査実施。

黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会

平成14年11月8日、今後の調査や保存・活用の方針を探るため「黒川地区中世宗教遺跡群保護調査委員会」を発足し、同日に第1回委員会、平成15年3月19日・同年8月26日・平成16年2月23日にそれぞれ第2～4回委員会を開催した。組織は以下の通りである。

委員長：小島俊彰（金沢美術工芸大学教授・富山考古学会会長、考古）、副委員長：久保尚文（富山大学講師、歴史・文献）、委員：宇野隆夫（国際日本文化研究センター教授、考古）、岸本整敏（富山県埋蔵文化財センター所長、考古）、久保智康（京都国立博物館学芸部工芸室長、考古・美術）、西井龍儀（富山考古学会副会長、考古）、福江 充（富山県立山博物館学芸員、歴史）、山岸常人（京都大学大学院工学研究科助教授、建築）、アドバイザー：伊藤清江〔～平成15年7月〕・舟崎邦雄〔平成15年7月～〕（富山県教育委員会文化財課課長、行政）、板井秀弥（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官、行政）、顧問：水野正好（奈良大学文学部教授、考古）、事務局：上市町教育委員会事務局文化振興係（発足時：上市町教育委員会生涯学習課）

黒川フェスティバル

平成13年度より本遺跡群の周知と活用をはかる事業として、「黒川フェスティバル－中世の里、黒川郷を行く－」と題したイベントを年1回実施している。主催は地元黒川地区町内会・穴の谷弘真会・上市町・上市町教育委員会・町観光協会で構成される実行委員会で、富山県教育委員会・富山考古学会・中新川郡教育会の後援を受けている。今年度で第3回を迎える。町内でも秋の恒例行事として定着している。内容は下記のとおりである。

平成13年10月14日 第1回黒川フェスティバル（参加者約1,000人）

歴史講演：奈良大学教授 水野正好氏「中世の里、黒川郷を行く」、史跡見学会：黒川良安顕彰碑・穴の谷墓場・黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・遺物展示：黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡

平成14年10月13日 第2回黒川フェスティバル（参加者約800人）

歴史講演：国立歴史民俗博物館助手 村木二郎氏「楡柴往生と経塚」、史跡見学会：円念寺山遺跡・黒川上山古墓群・穴の谷墓場・黒川良安顕彰碑・遺物展示：黒川上山古墓群・伝承貞興寺跡・円念寺山遺跡

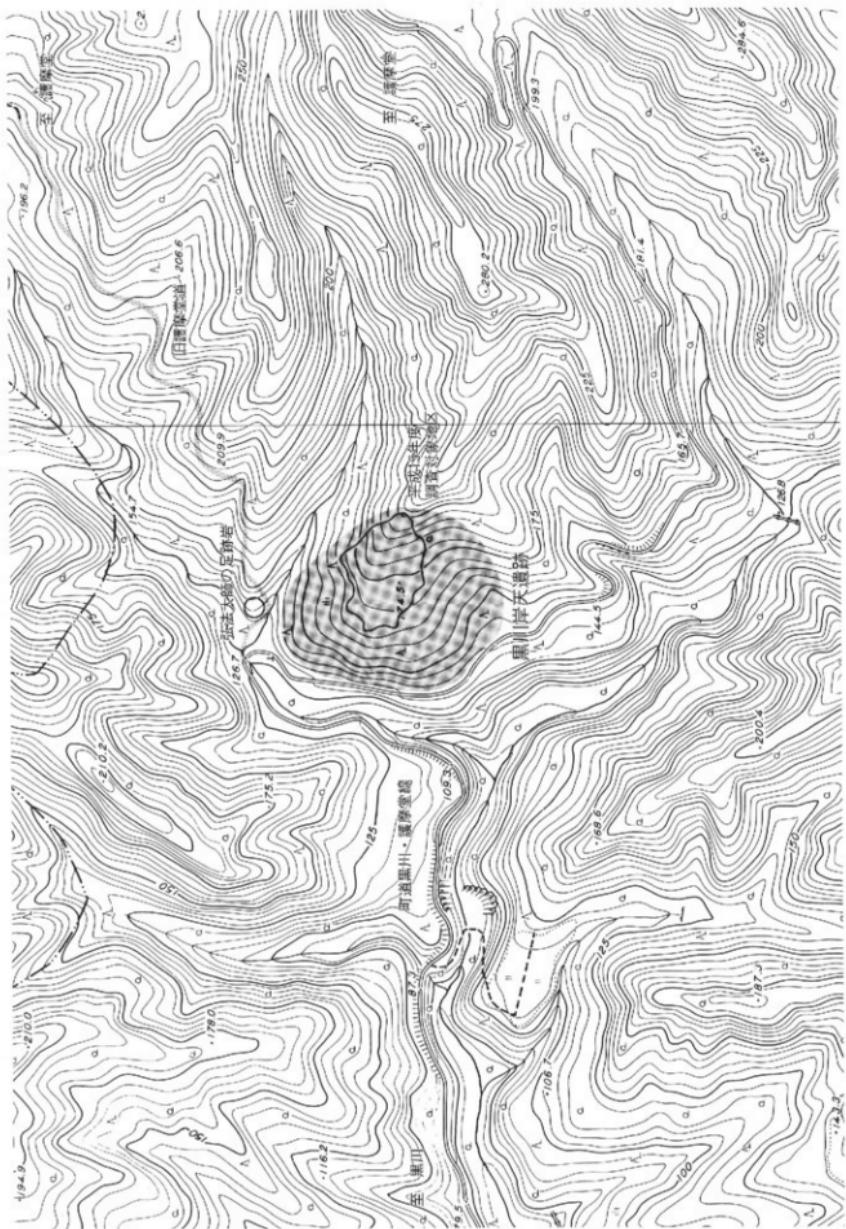
平成15年10月12日 第3回黒川フェスティバル（参加者約1,200人）

歴史講演：俳優・日本考古学協会会員 斎谷俊介氏「遺跡を旅する」、史跡見学会：黒川良安顕彰碑・穴の谷墓場・黒川上山古墓群・円念寺山遺跡・黒川良安墓碑・遺物展示：黒川上山古墓群・伝承真興寺跡・円念寺山遺跡

IV 調査結果

1. 遺構（第3図～第8図、図版4～図版17）

黒川岸天遺跡は、平成13年度に実施した分布調査で確認した平坦面18にあたり、標高約160～200mの山腹に立地する。遺跡は林立する巨岩群（以下「露岩」）とそれらの間に広がる平坦面群、そして斜面に開口する岩戻からなり、その範囲はおよそ30,000m²に及ぶものと推定される。一帯は杉の植林が行われているが、雜木・下草の繁茂や倒木な



第2図 遺跡周辺図(縮尺 1/5,000)

どが著しい。なお、地権者の方々の話によると、この地は植林以前には一部が茅場として利用されていたとのことであるが、その他の土地利用のあり方については不明である。

今回の調査では、木道跡の最高所付近の約8,000m²を対象に下草・倒木・雜木の除去を行い、地形の確認を行った。その範囲は世界測地系の平面直角座標X79787～79871、Y22517～22638にあたる。調査対象地区のほぼ中央に位置する露岩1を境に西側では平坦面が広がるが、反対の東側においては多くの露岩による凹凸の激しい地形があり、その背後の斜面には岩盤が開口する。また岩盤背後の斜面にも露岩群があり、そこを上り詰めると山地を形成する岩体が露出している。

平坦面の調査では第1～3トレンチ及び墳丘状の高まり（以下「墳丘状遺構」）について掘削を行い、遺構・遺物の検出を試みた。また、露岩群・岩盤については表土・堆積土の除去を行い、人為的加工痕の有無及び遺物の確認を行った。以下にその概要を述べる。

A. 平坦面（第3図～第5図、図版4～図版6）

今回図示した平坦面は、本遺跡中でも高所に位置するもので、露岩1際で南北に長い平坦面（平坦面1）とその西側・南側にかけてL字形に一段高く取り囲むような平坦面（平坦面2）とからなる。なお図示した範囲外では、北側は急傾斜で落ち込んで下方の沢へと至るが、下端付近まで下ると平坦面が広がり、また露岩が多く認められる。この沢は徒歩で容易に越えられる場所もあり、その対岸には旧護摩堂道から分岐した小道も存在することから、本来はこちら側が遺跡の入り口であった可能性がある。また西側・南側は比高差のある段を経て平坦面がさらに続き、露岩群も多く認められる。

平坦面1は南北約40m、東西約20mの南北に長い平坦面であり、露岩1に添うかたちで広がるほぼ水平な面である。北は谷に向かって開け、また中央付近では平坦面2の突出（岩盤の露出を伴う）があり南北の境界となっているようにも見える。平坦面2はその平坦面1を半ば取り囲むようにして広がるが、所々に岩盤に由来する高まりや段地形と思しき痕跡もありいくつかの面で構成されていた可能性が高い。しかし土砂の流出によって旧地形が損なわれているようで、判然としない。この平坦面2のほぼ中央には岩盤に由来しない墳丘状の高まりがあり、90度屈折した南側では平坦面1では見られない比較的大型の礫の集積が認められる。またこの屈折部の縁辺付近には壠状の集石が確認できる。なお平坦面1と平坦面2とがなす段の部分には所々で岩盤を核とした集石が認められるが、礫は概ね地表面上にあり、後世に寄せ集められたものようである。

このうち平坦面1と露岩1の境界部分に第1トレンチ、平坦面1・2の境界部分に第2トレンチ、平坦面2の集石部分に第3トレンチ、墳丘状遺構にもトレンチをそれぞれ設定し、遺構・遺物の検出を試みた（第4図・第5図）。

その結果、第1トレンチにおいては露岩1の前面において地山層（9層）の落ち込みを埋めるような互層状の土層（4～8層）を確認した。土質の違いは明瞭ではないが褐色土と暗褐色土が交互に比較的しまりの強い状態で堆積しており、またこの土層によって露岩1の前面が標高169.4mほどでは平坦な面となることから、人為的な造成土であるものと考えた。なお遺物は表土下から近世以降の伊万里片が1点出土したのみであり、造成の時期は不明である。

また第2トレンチでは第1トレンチほど明瞭な土層として観察できたわけではないが、平坦面2の造成面が当初はもう少し高く、現状のなだらかな段地形は高所（平坦面2）の造成上（4層）が流れ込んで形成されたものであることが窺われる。ただし平坦面1の造成面が判然とせず、第1トレンチにおける造成面との連続性は不明瞭である。なお遺物は表土下から近世の越中瀬戸の小片が1点出土したのみである。

第3トレンチの集石については、その一部が当初より地表に露出していたものであるが、検出の結果予想以上に多くの礫が集められており、またその多くが地面上にのる形で配されていた（一部は岩盤礫の表出）。これらの礫には現状では有意な配置関係は認められなかったが、平坦面1や平坦面2の他の部分ではほとんど見出せない大きさの礫（20～30cm）が一定の範囲内に集められていることから、かつてはこれらが整然と配置され、何らかの施設が存在

していた可能性は高いものと考えた。また60~80cmの大型の礫が円環状に配されてその内部に小振りな礫が充填されるという構造を持つ部分もあり、注意される。

壇丘状遺構は、ビンボール等の探索によって岩盤に由来する高まりとは異なることがわかったものである。平面形は長径約10m、短径約6.5mのほぼ南北に向く長円形を呈し、高さは1mほどである。壇墓あるいは塚である可能性を考えし土字型にトレンチを設定して表土の除去を行ったところ、表土直下で非常にしまりの強い黄褐色粘質土が現れた。念のためサブトレンチを設定して掘り下げてみたが同一の層が続くのみで、盛土ではなく地山の削り出しによってこの地形が形成されたものと考えた。なお墳頂部でも埋納塙や集石のような痕跡は認められず、この地形がいかなる目的の元で造り出されたのかは不明である。

B. 露岩群（第6図・第7図、図版6~図版13）

これらの露岩群は当初その一部のみが露出しており、大部分は腐植土によって覆われていたものである。今回の調査では平坦面1に隣接する露岩1の東側に位置する露岩2~露岩10について表土の除去を行い、露岩の形態と人為的加工痕の有無を確認した。なお、これらの露岩は前述したように軟質な角礫凝灰岩で風雨による風化が著しく、土中にはいった部分以外はほとんどが角が取れて「とろけた」ように摩滅している。また手で触れてもバラバラと細かい粒が落ちるほど脆いものである。

露岩1 今回の調査対象地区内で最大の露岩である。高まりとして存在する部分は長さ・幅とともに20m以上、高さは平坦面1から約11.5mを測る。周囲の地形を見ると、後述する露岩2・3とともにこの山地の尾根を構成する岩体のようである。頂部は狭いながらもやや平坦となり、頂部に立つと今回調査区の全てを見渡すことができる。もし木立がなければ谷に沿って西方（黒川集落方向）への視界が良好であることが窺われる。本露岩については作業上の安全を考慮して表土の除去等は行っていないが、不自然な凹凸や礫の堆積が認められる部分があり露岩3の表土除去前と似た状況であることから、本露岩についても人為的な加工痕が存在している可能性が高い。なお、そうした部分は本露岩の北~東側に集中しており、露岩3の加工板の延長にあたるものであろう。

露岩2 露岩1・3と同じ尾根筋上の露岩で、長さ15m、幅7mにわたって馬の背状に続く岩を総称したものである。全体的にサイの皮膚を連想させるような状態に割れており、部分的に欠失している。風化により人為的な加工痕の有無ははっきりせず樹根によるものとも考えられるが、欠失している部分があることや円盤状に整形されたように見える部分が認められることから、人の手が加わっていた可能性もある。なお、後述する岩屋へ至る場合にはこの露岩2の割れ口や欠失部分を歩くと都合がよかったことを追記しておく。

露岩3（第7図） 露岩1と2の間に位置する露岩であり、これらと一体である可能性が高いものである。検出した範囲は長さ11m、幅6m、高さ4.5mを測る。本露岩は検出前の時点では不自然な凹凸や礫の堆積が認められていたもので、表土及び礫を除去したところ露岩の上面と北側面に多数の人為的加工痕が集中している様子を確認した。

加工板を微細に見ると主に幅1cmほどの線状の溝や円錐形の穴、橢円形の浅い窪みであり、指先ほどの太さで先端の尖る整状の工具によるものであることが想定できる。これらの加工痕の集合体は、①円筒状もしくは腕状に割り貫いたもの、②方形に剥ぎ取ったようなもの、③球体状のものを切り出そうとしたもの、④不定形に抉り取ったもの、に区分できるが識別が困難な部分も多い。①・②の場合、岩面に対しほぼ垂直方向に輪郭を彫り込み、そこでできた空間の底部から横位に削り取ることによって目的の石材を切り出すという工程が窺える。大きさは①は直径が80cm前後ではほぼ一定で、②では45×45cm、90×90cm、120×150cmとまちまちながらも尺を意識しているようである。なお、剥ぎ取り面に大きな段差が認められる部分もあり、作業上の失敗も少なくなかったようである。

これらの加工痕はその多くが加工に際して生じたと見られる夥しい数の石片で埋没していた。このことは本露岩に関する活動の終了とともに「片付け行為」が行われたことを示唆するものであろう。また側面北半の加工痕を埋める石片中には平整状の工具による二次的な加工痕をとどめるものが数点ではあるが含まれており（図版2・3・19・

20)、ある程度の整形まではこの地で同時に行われていたものと考えられる。

なお、これらの右片中あるいはその周囲からは土器等は1片も出土しておらず、こうした活動が行われた時期を特定することはできなかった。

露岩4 露岩3北東の平坦面に位置する露岩で、検出部分で長さ8m、幅6mのほぼ方形を呈する。南東方向は岩壁の開口する斜面に向かってまだ続くが、堆積土が厚く土量の都合上今回の調査では確認できなかった。露岩上面は南東方向にやや傾斜するものはほぼフラットで、あたかも低い壇状を呈するようである。上部に何らかの施設を置くことも容易であったものと推定される。なお、南京部分には人為的なものは判然としないが縫の抜け落ち痕とは考えにくい径10cm、深さ15cmほどの穴がいくつか確認できる。ただし有意な配置にあるわけではなく詳細は不明である。

露岩5 露岩4の北西方向に軸を合わせて連なる長さ10m、幅4mの細長い露岩である。高さは西側の地山面から2mほどである。本露岩の上面には長さ2.7m、幅0.9mの長円形を呈するほぼ水平で平坦な面が認められる。この部分のみ堆積土の堆積があったため周囲が風雨によって浸食されただけとも考えられるが、現状では5cmほどの壇状を呈する。この部分の表面は縫の抜け落ち痕と考えられる小孔が無数に認められる。また鉄錆色に赤化しているが、被熱によるものというよりは土中時の鉄分の沈着によるものであろう。なお人為的に平滑にされたような痕跡は現状では見出せなかった。

露岩6・7 露岩5北東の崖際に位置する露岩で、当初は別のものとしていたが一連の露岩である。長さ10m、幅6mで、表面は露岩2同様に割れている。露岩7上には杉が生えており、一部その根による浮き上がりやひび割れが認められるため、これらの割れはこうした根の営力によるものである可能性が高いが、露岩2同様に欠落部分もあるため一概には言えないようである。なお、現状では人為的加工痕の有無は確認できなかった。

露岩8 露岩5の延長上にある2つの岩で構成される露岩で、北側の岩に南側の岩が乗り上げ、その下方にはトンネル状に空間がある。長さ3m、幅2.5mで高さは北端から1.5mを測る。下方に位置する岩の頂部、つまり上方の岩との接触部分は平坦になっており、さらには人為的なものかどうかははっきりしないものの、露岩3で認められた線状の加工痕によく似たものが残されている。2つの岩を咬み合わせるために加工されたものであれば、人為的に積まれたものである可能性があり注目されよう。

露岩9 露岩5の西側に位置する露岩で、長さ5m、幅2mを測る。中央がやや高くなり、そこを中心に東西に走る裂け目が認められる。また南端部はいくつかに割れているが、現況の観察からはこれらは人為的なものではなさそうである。なお、本露岩と露岩10との間に設けた地山確認用トレッチでは、本露岩の傾斜が表下を境に大きく変換していることを確認した。このことは露出部分が本来はもう少し急角度で立ち上がっていったものがその後の風化によって失われたことを示す。この流失部分の大きさから推定すると、本来は何がしかの加工が施されていた露岩であっても、現在では消滅している可能性が大きい。またそれと同時に、多くの加工痕が確認できた露岩3の埋没状況(片付け行為による意図的な埋め戻し)が幸運なものであったことを意味している。

露岩10 露岩9の北に位置する露岩である。露岩4～9がのる平坦面とその北側にある狭小な平坦面との斜面部にあり、ちょうど土止めのようなあり方を示している。長さ7m、幅3mで高さは下位の平坦面から2.5mを測る。成因は不明であるが西側に大きく亀裂が走る。

C. 岩屋（第3図・第6図・第8図、図版14・図版15）

前述してきた露岩群の背後に当たる南東側の急峻な斜面の中腹には、小規模な岩壁が開口している。この岩屋は平成13年度の分布調査の際にも注意されていたもので、今回の調査における主要対象造構でもあった。

今回の調査では岩屋内部に堆積した土砂の除去と前庭部の状況の確認を行った。調査の結果、当初の予想よりも土砂の堆積が少なく、また内部の空間も狭いものであることが判明した。天井石が覆う範囲で計測すると、人間が入り込めるスペースは高さ1.2m、幅1m、奥行き1.5mほどで、1人が身をかがめてようやく入れるといったものであった。

ただし風雨を凌ぐには十分な広さであるともいえる。内部は奥に行くにつれて床面が下がり、奥壁の下位に幅50cmほどでさらに奥へと続く空間が存在する。なおその空間は長さ2mのポールが全て入り込むほど続いているが、前庭部の高さによってそれ以上の長さのものを差し入れることができず、詳細な実行は不明である。

また、岡上では現れていないが、この床面では幅・深さともに20cmほどの溝状の地形を確認している（図版15の3・4）。両側はほぼ垂直に近く落ち込み、向かって左側の肩部は不自然に平滑になっている。明瞭な加工痕は認められないものの、人為的なものである可能性がある。なお、この溝状地形付近では表土下で炭化物の集中を検出しているが（図版15の2）、中には生焼け状のものもあり古い時期のものではないようである。

前庭部は移植ごとで削れる非常に軟質な岩盤とそれに由来する土で構成される。平坦な面として認識しうるのは約2mほどで、露岩群のある半壇面に向かって急激に落ち込んでいる。両端付近には大型の岩が配され、その間は1.5mほどを測る。この岩の上面には露岩3同様の線状の加工痕が認められ、面を整えたように見える。あるいは天井石の底部分の短さを補うための小屋掛け状の構築物が存在していたことを示すものかもしれない。

なお、岩屋内部・前庭部のいずれからも土器等の遺物はまったく出土しておらず、この岩屋が利用された時期及び人の手が加えられた時期については不明である。

D. 岩屋背後の斜面（第3図・第6図、図版15・図版16）

今回の調査では特に表土の除去等は行っておらず詳細は不明であるが、岩屋背後の急峻な斜面にもいくつかの露岩が顔をのぞかせている。崖際に帯状に連なる露岩14とはほぼ平行に走る露岩15の間は幅7mほどの通路状を呈しており、注意される。この通路状の地形を上り詰めると、この山地の本体とも言うべき岩体が露出しており、大きな喉として立ちはだかっているように見える（図版16の3）。もし杉の植林がなければこの岩体は下方の露岩群からもよく見え、往時は相当の存在感を放っていたものと推測される。

なお、露岩15が部分的に不自然な形状を呈していたことから、確認のため一部表土を剥がしてみたところ、3段ほどの階段状をなす加工痕が認められた（図版16の1・2）。全体が窓える上2段は長さ1m、幅25cm、厚さ15cmほどにわたって剥ぎ取られている。工具痕のあり方は露岩3のものと共通し、同時期の所産であろう。

2. 遺物（図版2・図版3・図版19・図版20）

今回の調査では、第1・2トレーナーで出土した近世以降の陶磁器片2点を除いては土器等の出土ではなく、ここで図示したものは全て露岩3北側出土の二次加工痕のある石材である。

図版2の1～図版3の1の4点は、いずれも湾曲する厚さ5～6cmの板状の石製品断片である。外面・内面のいずれかの表面が風化によって失われているものが多いが、幅3～4cmほどの半円状工具による平滑化が施されている。なお、線状の加工痕は同一工具の縁辺部によって形成されたものであろう。これらの石材は概ね円筒形をなす物体の断片と想定され、その外径は65cm前後、内径は60cm前後で4点ともよく共通する。長さこそばらつきがあるが、いずれも縁辺が全て欠損していることを考えると、本来は同一個体であったものの断片同士である可能性がある。なお、この数値は露岩3における「①円筒状もしくは碗状に削り貫いたもの」とした加工痕にはほどよい収まりを見せ、これらはそこから切り出されたものである可能性が高い。これらが本来どういった形状をなしていたものかについては、両端の空いた「筒」状のもの、一方が底となって塞がるもの2者が想定できるが、内面の加工痕に上下方向からのものが混在するというあり方からは、前者である可能性が高い。完成品がなく詳細は不明であるが、例えるならば「井戸側」状の製品であったものであろう。

図版3の2は一見するとそのものが加工対象物のようであるが、長さが図版2の1とほぼ同じ45cmであること、最大径が37cmで先に想定した円筒状製品の内部にすっぽりと納まり、なおかつ適度な空間も確保できていること、さらには加工痕の方向が両端からのものに限定されていることなどから、先に述べた4点の断片がなす円筒状製品の内部を削り貫いた「芯」である可能性が極めて高いものであろう。

3. 分布調査（第9図・第10図、図版18）

今回の調査の一環として行った分布調査は、富山大学人文学部考古学研究室の協力の下、西種地区を中心に行った（第10図）。この地区は大岩地区を入場口として立山へと至ったと想定されるルートの途上にあり、中世の郷岳・立山信仰のあり方を探る上で重要な地区である。対象地区が広範囲にわたるため、予め西種区長の権垣忠一氏から伝承等についての情報を得た上で、ある程度ポイントを絞って踏査を実施した。以下のその概要について述べる。

水上集落付近では、集落西方のハゲ山（標高477m）の東麓部に位置する「経塚」と伝承される3基の塚状の高まりを確認した。1基は長さ4m、幅2.5mの長円形を呈し、残る2基はほぼ3m四方の方形で基壇状の高まりを伴う。いずれも表面には礫の散布が認められる。この「経塚」のすぐ北には「尼さんの池」と呼ばれる谷地形があり、その上方の平坦面が小道で削られた部分より珠洲焼あるいは甕の体部片1点を採取している（図版3の3）。またその北方では寺院の可能性が高い広大な平坦面群が広がっており、さらにその下方には現代のものではあるが墓地が存在する。このハゲ山東麓一帯は、かつては経塚・寺院・墓地を核とした宗教的な空間であった可能性が高く、今後注意が必要な地域である。なお、この水上集落には「京塚」姓が多く、これらとの関連も想定されるところである。

西種集落の近辺では、集落を見下ろす西側の尾根上でかつて神社があったと伝えられる平坦面を確認した。斜面部には狭小な平坦面が郭状に連続し、頂部の平坦面には石垣状の石積みをもつ基壇が残存する。その他集落近辺では、地元では「地神様」と呼ばれる縄文時代の石棒・五輪塔の空風輪・宝篋印塔の相輪が記された岩陰2箇所も確認した。

西種集落の南に位置する骨原集落（現在は無人）では、集落北側に広がる平坦面群と、その東に位置する標高444mの独立峰について踏査を行なった。平坦面群では土壘状の高まりや石積・石垣状のものを確認した。独立峰は急峻な斜面のいたるところで岩盤と想定される白色の角礫が露出しており、白い山のように見える。頂部は平坦で、そこからは西種・東種地区一帯を見渡すことができる。なお、先の平坦面とこの独立峰は土橋状の高まりによって連結しており、相互に有機的な関連を持つものであったことを想定させる。

骨原集落を抜けて林道西種線を南に進むと、急峻な斜面の上部に「西種の岩屋」と呼ばれる岩屋がある。ここは明治時代に鶴仙和尚という僧が修行した場所と伝えられているが、鶴仙和尚以前にも修行者の利用があった可能性が高い。この林道をさらに南下して山中に進むと、「武家屋敷」「キト（祈祷？）城」「お宮」「スワリの寺」等の各種伝承地が点在する。今回の調査ではこのうち「武家屋敷」について簡易測量を実施した（第9図）。この「武家屋敷」は林道西種線と小又川へ降りる古道とに挟まれた地区で、大小12箇所の平坦面が長さ約200mにわたって連なる。東方には郷岳・大日岳を大きく望むことができる。その他の伝承地についても踏査を行ったが、「キト城」「お宮」では明確な平坦面等は確認できなかった。ただし「スワリの寺」では寺院の存在を裏付けるような平坦面群を確認した。現在上市町市街地の正印地区に所在する浄土真宗大谷派光願寺は、種地区の奥に位置する須張（スワリ）から移転したものと伝えられており、その跡地に比定できよう。町内では15世紀後半の蓮如の北陸進出によって急速に広まつた浄土真宗への転宗に伴って寺院が山間地から平地へと移転した事例が多く知られており、この「スワリの寺」にも同様な背景があつたものであろう。転宗前の宗派については不明であるが、他の寺院の事例からすると真言宗系であった可能性が高く、中世の郷岳・立山信仰とも深く関わっていたものと推測される。

V まとめ

前述の調査結果とそこから得られた見解を整理し、本報告のまとめに代えたい。

- 黒川岸天遺跡は黒川地区東端の山中に位置し、弘法大師ゆかりの地・農摩山地区との境界にあたる。遺跡は標高約160～200mの山腹に立地し、林立する巨岩群とそれらの間に広がる平坦面群からなる。

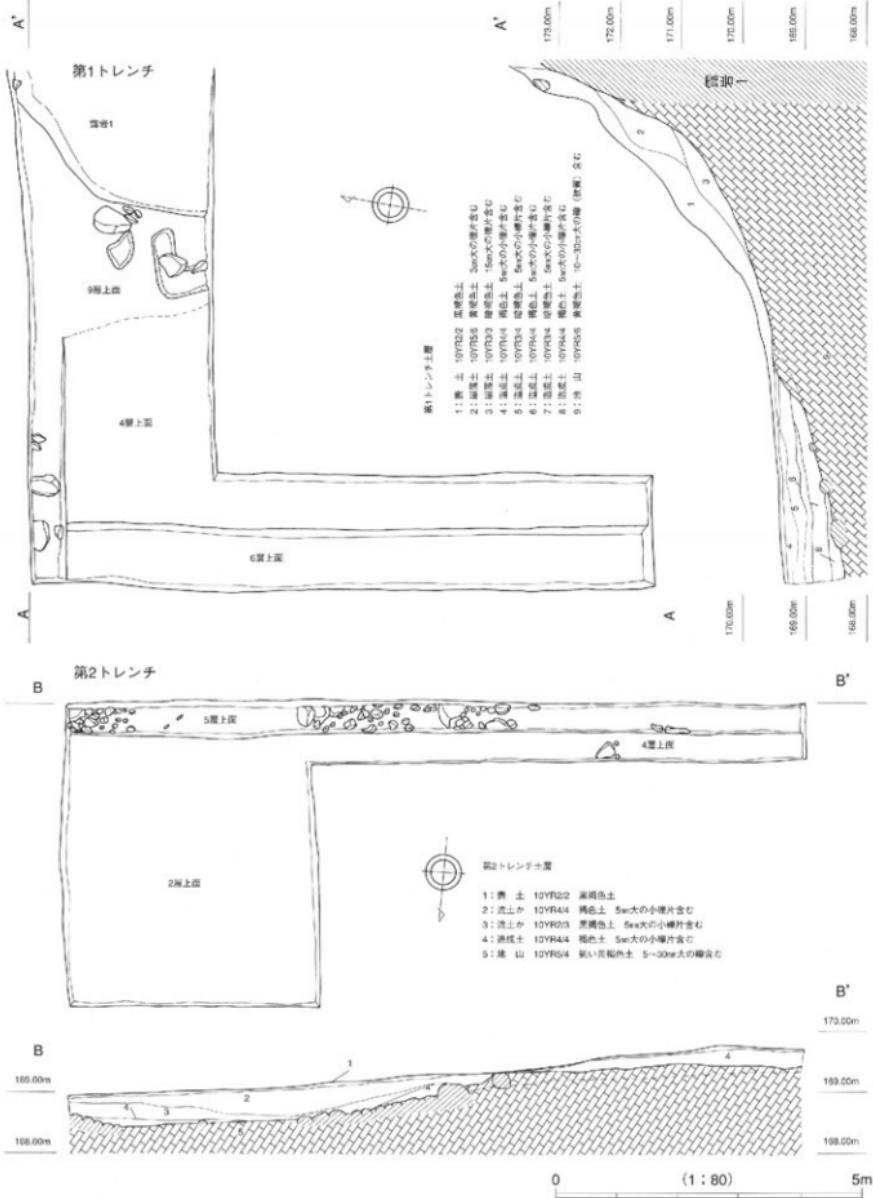
- 平坦面の調査では建物跡や土壠などのような明確な遺構は検出できなかったが、第1・2トレンチではこれらの平坦面が造成されたものであること、第3トレンチではかつては整然と配置されて何らかの施設を伴っていたであろう集石群、さらに目的は不明なもの盛土ではなく地山の削り出しによって形成された長円形の墳丘状遺構など、多くの人為的な地形変更の状況を確認した。
- 露岩群の調査では、露岩2~10について表上の除去を行って岩面の状態を確認し、そのうち露岩3について明瞭な人為的加工痕が集中していることを確認した。これらの加工痕は先端の尖る盤状の工具によるもので、①円筒状もしくは碗状に削り取ったもの、②方形に剥ぎ取ったようなもの、③球体状のものを切り出そうとしたもの、④不定形に抉り取ったもの、などがある。そのうち①・②では岩面に対しほば垂直方向に輪郭を彫り込み、そこへできた空間の底部から横側に削り取って目的の石材を切り出すという作業工程を窺うことができた。
- 露岩3の加工痕の多くは加工の際に生じた石片で埋まっており、作業の終了とともに「片付け行為」が行われたことが窺われた。なおそれらの石片中には平整状の工具による二次的な加工痕をとどめるものが数点ではあるが含まれており、観察の結果径65cm、高さ45cm、厚さ5cmほどの円筒形製品の断片とその内部の削り貫きによって生じた「芯」であることが想定された。
- 岩屋の調査では、内部の空間が予想よりも狭いものであることが判明した。ただし構造的地形、岩面に残る加工痕などから人の手が加えられていることが窺われた。また、天井石の底部分の短さを補うための小屋掛け状の構築物が存在していた可能性を指摘した。
- 本遺跡における人間活動については、現状では人為的な地形変更、石材の切り出し及び加工が行なわれていたということ以外には不明である。また、その活動の時期を示す遺物も出土していない。同質の石材は同じ山中でもより標高が低く運搬も容易な場所でも多く露出しているにもかかわらず、このような高所にわざわざ平坦面を造成し、また決して良材とは言えない石材を用い、しかも特に集中的・慣常的な生産を行なっていたわけではないという多くの事実は一体何を意味するものであろうか。そこには、黒川地区と護摩堂地区との境界に位置するという本遺跡の立地条件や、「仏岩」「弘法大師の足跡岩」などの伝承、そして平地における日常生活とは隔絶された特異な景観などといった諸要素から窺われる、「この場所の石を使うことの意味に関する宗教的背景」が大きく関わっていたものかもしれない。詳細については今後の調査で明らかにしていただきたい。
- 黒川岸天遺跡の発掘調査と並行して実施した分布調査では、人岩地区を入場口として立山へと至ったと想定されるルートの途上にある西種地区周辺を対象に踏査を行った。その結果、ハゲ山東麓一帯がかつては経塚・寺院・墓地を核とした宗教的な空間であった可能性が高いことをはじめ多くの発見があり、この地域が中世の頃より立山信仰のあり方を探る上で重要な地区の一つであることが確認できた。

引用・参考文献

- カ 上市町 1970 『上市町誌』
 上市町教育委員会 1995 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』
 上市町教育委員会 1997~2003 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第2次~第8次調査概報』
 サ 静岡県湖西市教育委員会 1997 『大知波峰魔守跡確認調査報告書』
 タ 立山史料調査会・宇奈月町教育委員会 1999 『富山県下新川郡宇奈月町仙人岩壁発掘調査報告書』
 立山町教育委員会 1994 『芦跡寺室堂遺跡~立山信仰の考古学的研究~』
 立山町教育委員会 1997 『立山越山山頂遺跡~雄山神社縁本社社殿建設事業に伴う調査~』
 宮山地学会編 1986 『富山県の地形・地質~自然環境管理計画策定のための調査~』
 ハ 福光町・医工山文化調査委員会 1993 『医工山文化調査報告書 医工は語る』
 北陸中世土器研究会 1994 『中世北陸の寺院と墓地』 第7回北陸中世土器研究会資料

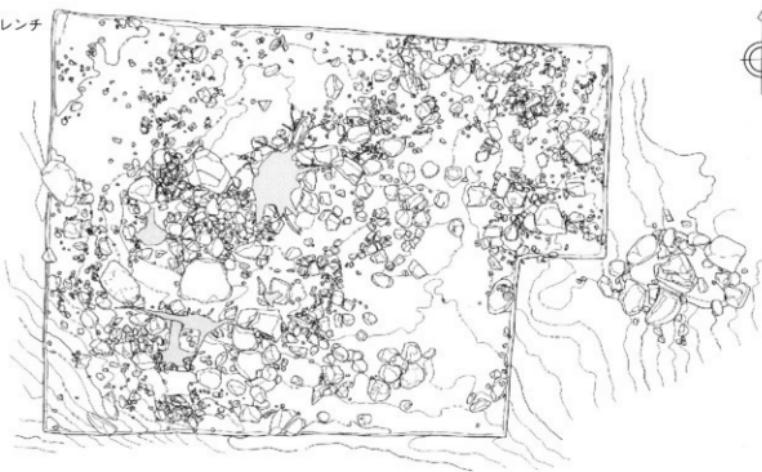


第3図 遺構全体図 (縮尺 1/400)

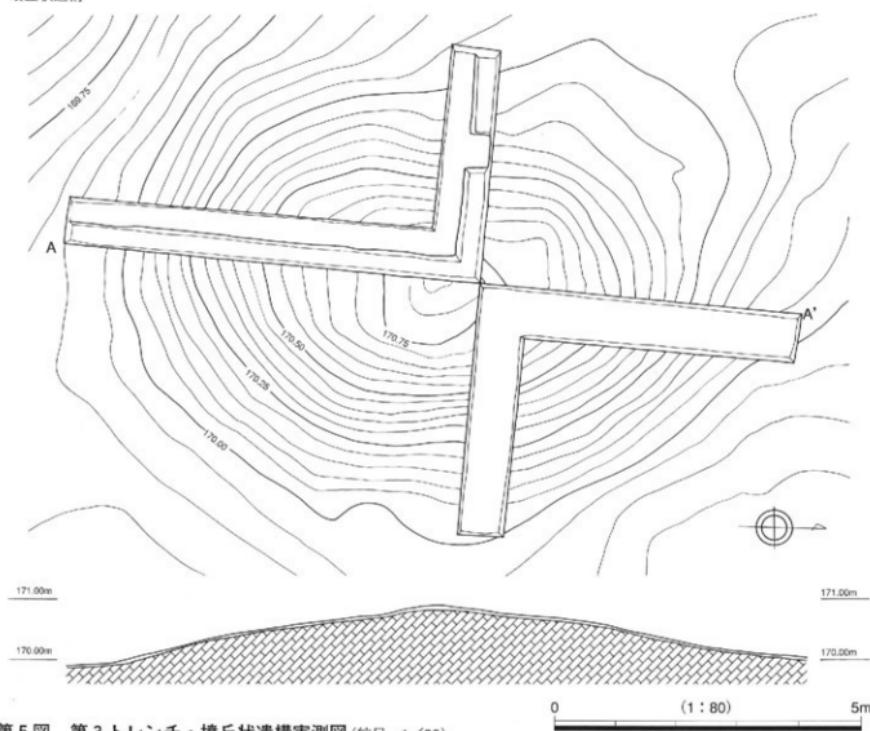


第4図 第1トレンチ・第2トレンチ実測図(縮尺 1/80)

第3トレンチ

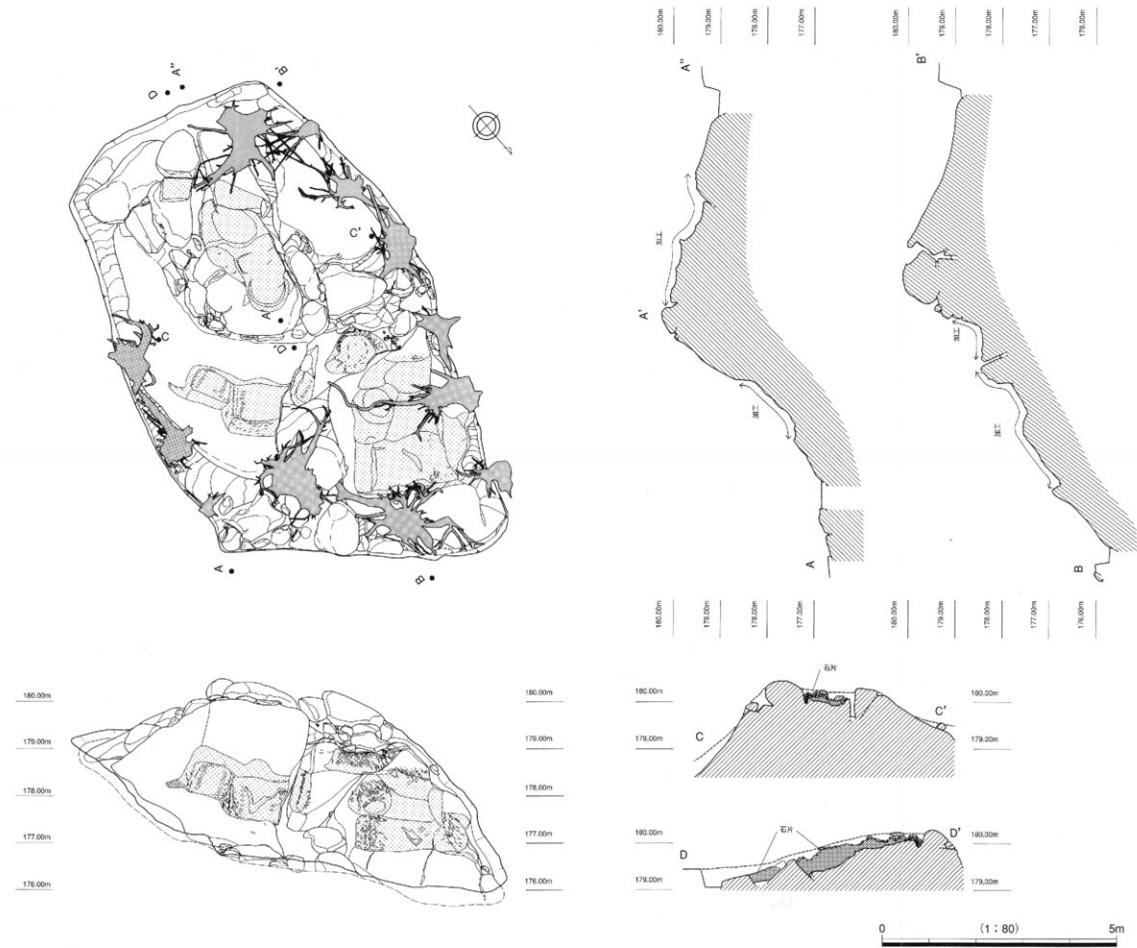


墳丘状造構

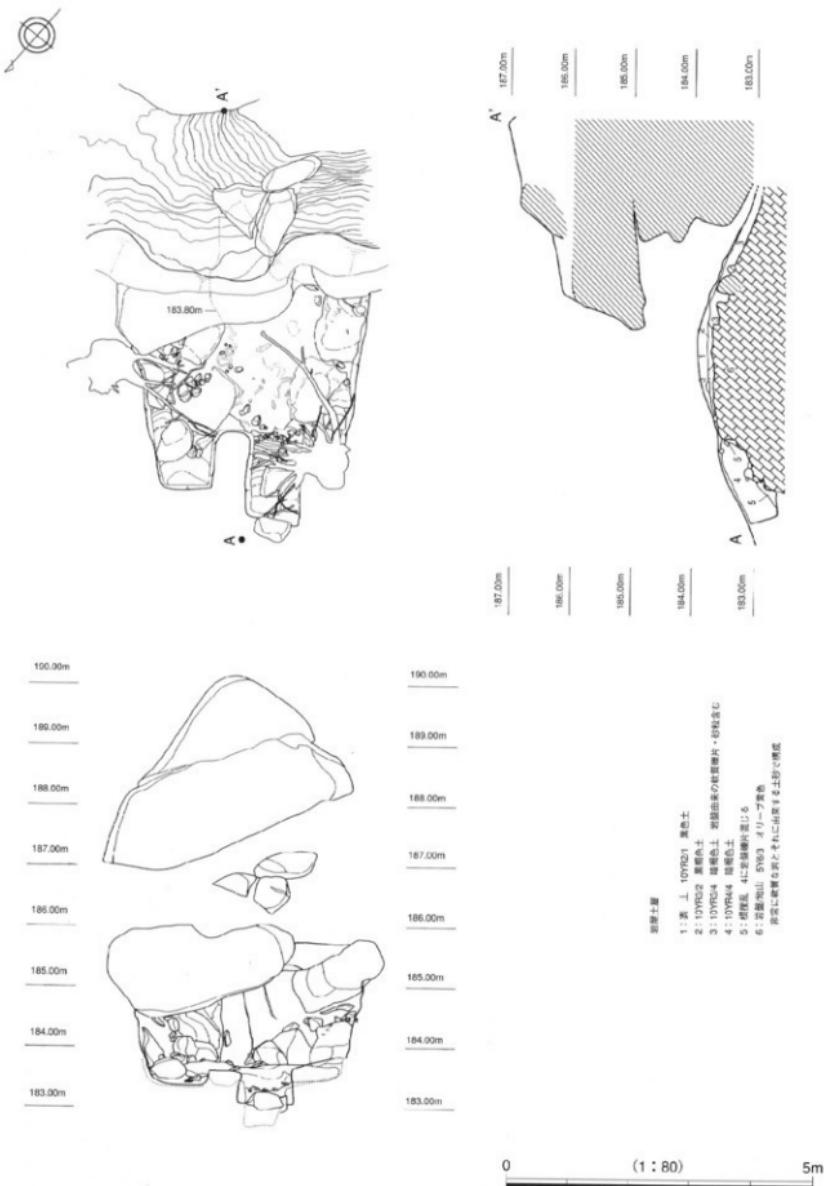


第5図 第3トレンチ・墳丘状造構実測図(縮尺 1/80)





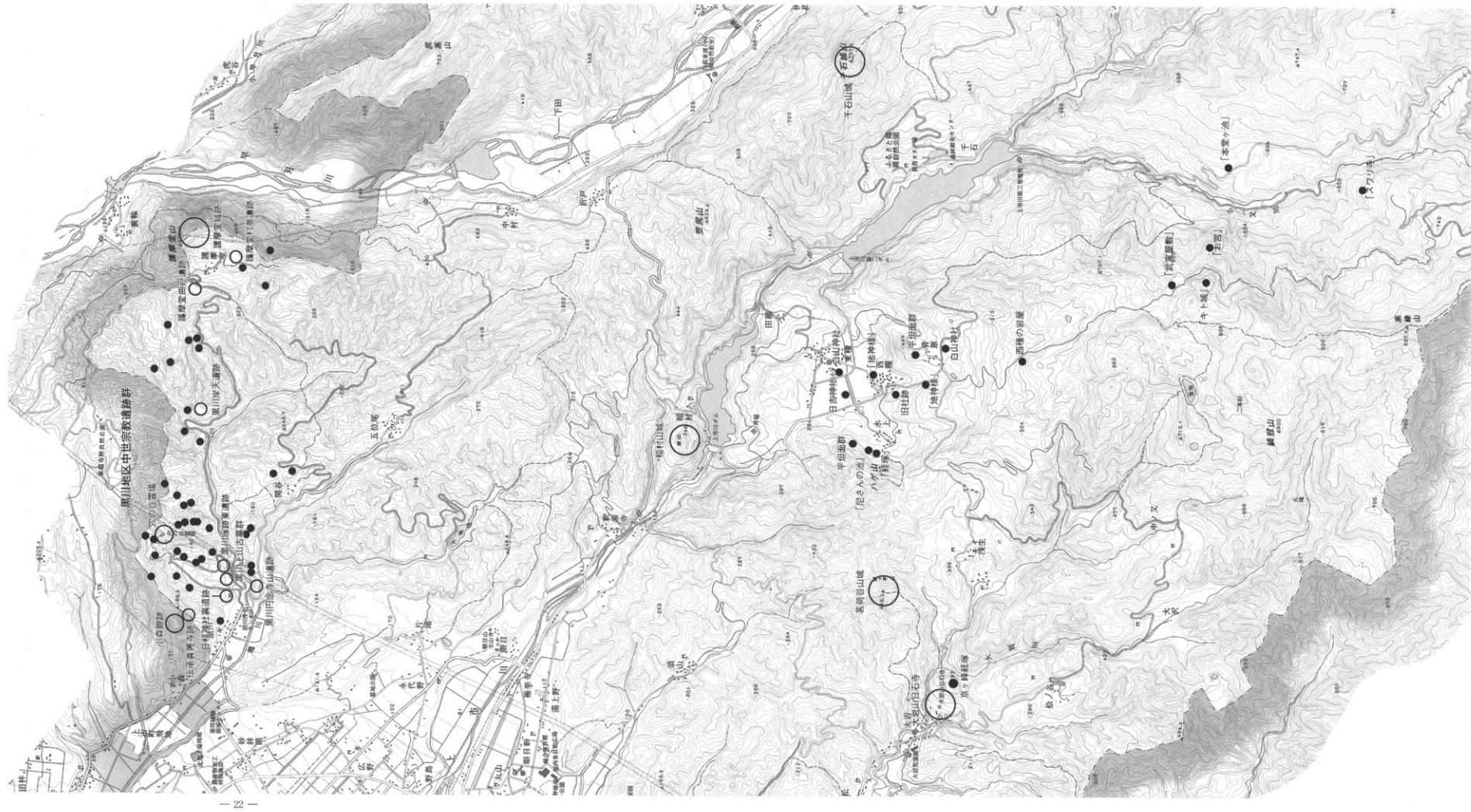
第7図 露岩3実測図（縮尺 1/80）



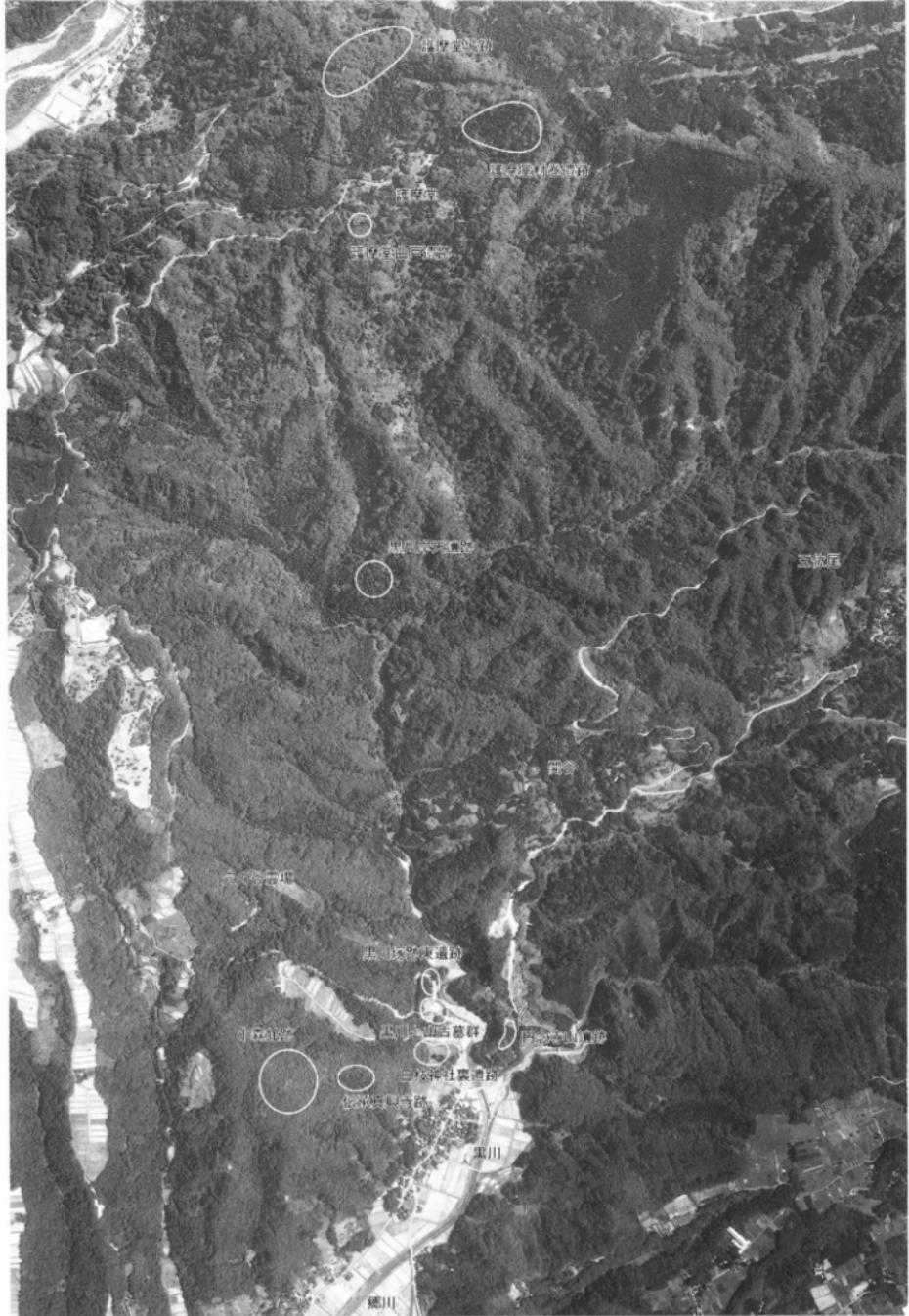
第8図 岩屋実測図(縮尺 1/80)



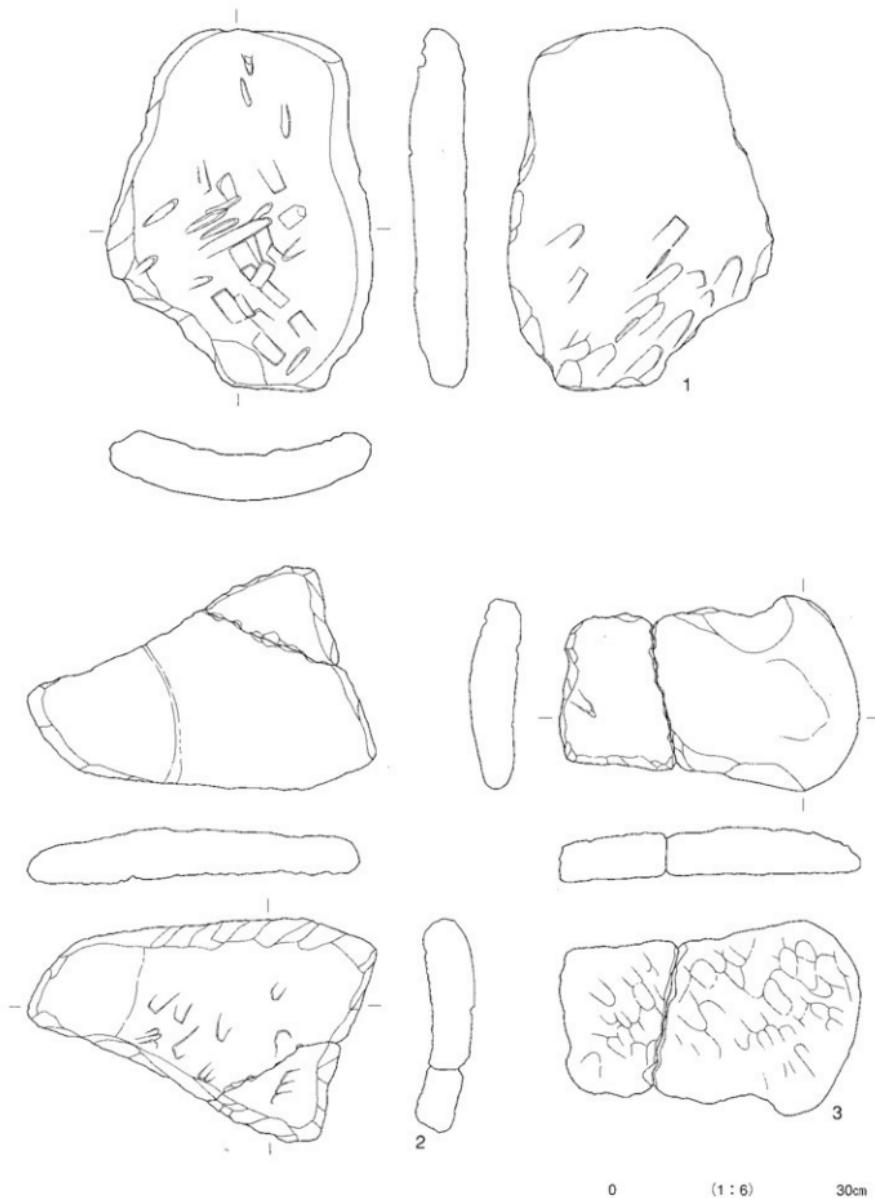
第9図 分布調査「武家屋敷」伝承地実測図 (縮尺 1/800)



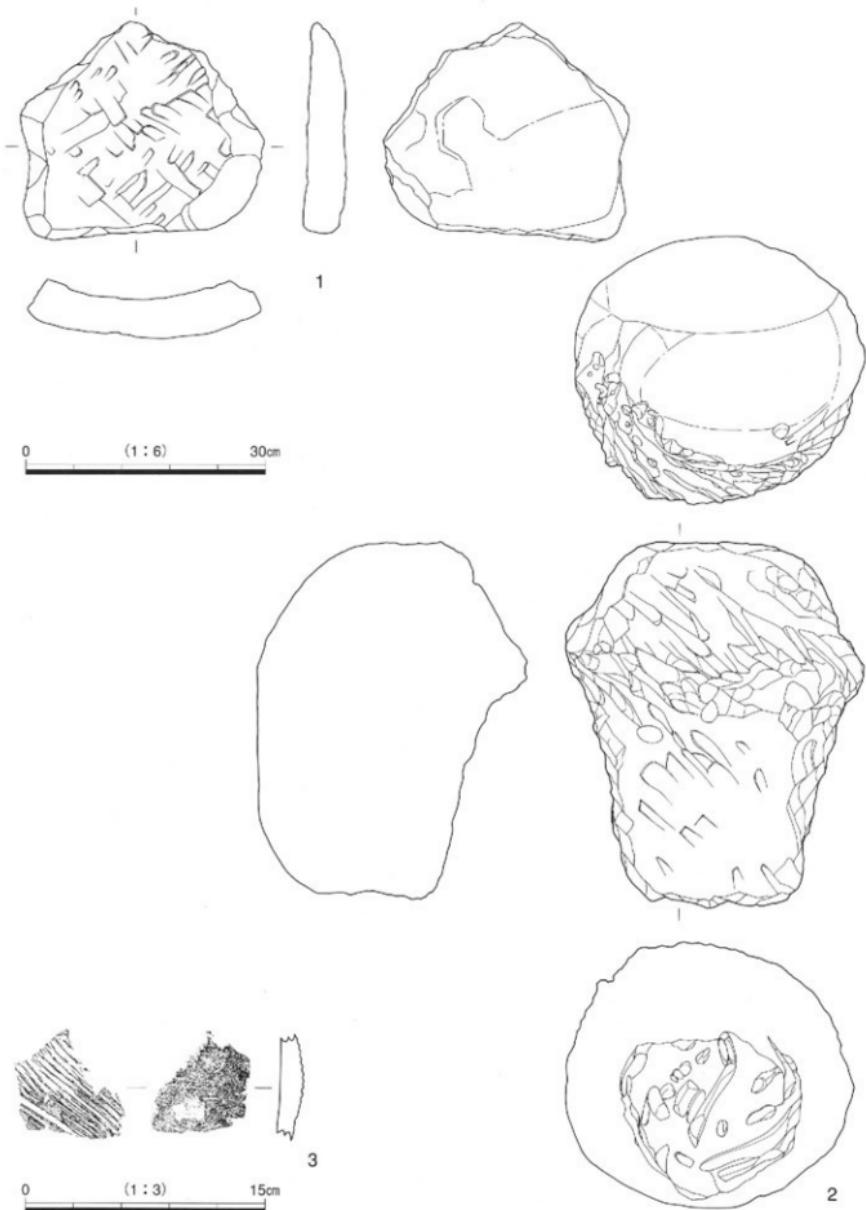
第10図 周辺関連遺跡分布図(縮尺 1/25,000)



図版1 周辺航空写真（平成8年撮影、左が北）



図版2 遺物実測図(縮尺 1/6)
露岩3北側出土



図版3 遺物実測図(縮尺 1・2,1/6.3:1/3)
1・2:露岩3北側出土, 3:分布調査採取



2



3



4



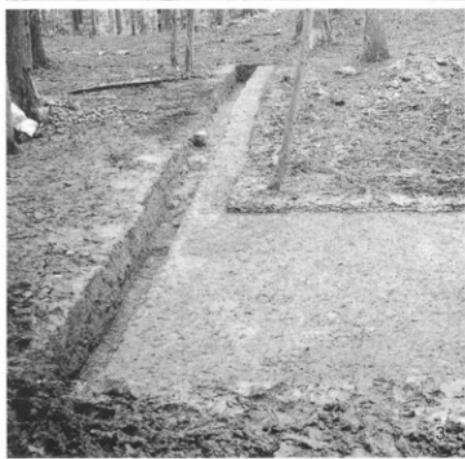
5



6

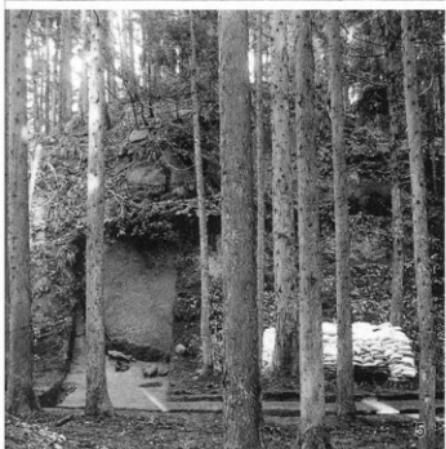
図版4 遺構写真

1: 通路遠景、2・3: 平坦面、4-6: 第1トレンチ



図版5 遺構写真

1:第1トレンチ, 2・3:第2トレンチ, 4-6:第3トレンチ



図版6 遺構写真

1・2：墳丘状遺構，3・4：平坦面の集石，5・6：露岩1



図版7 遺構写真

1：露岩群、2-4：露岩2、5：露岩3



1



2



3



4



5

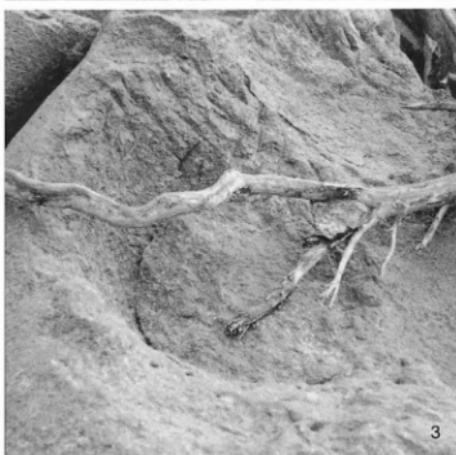
図版8 遺構写真

1:露岩3上面、2・4:露岩3上面の石片堆積状況、3・5:露岩3上面の加工痕



図版9 遺構写真

1：露岩3側面、2-5：森岩3側面の加工痕



図版10 遺構写真

1-5：霧岩3側面の加工痕、6：霧岩3遺物出土状況



1



2



3



4



5

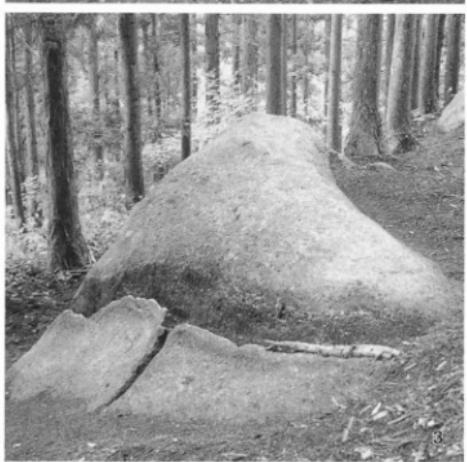
図版11 遺構写真

1:露岩4・5、2・3:露岩4、4・5:露岩5



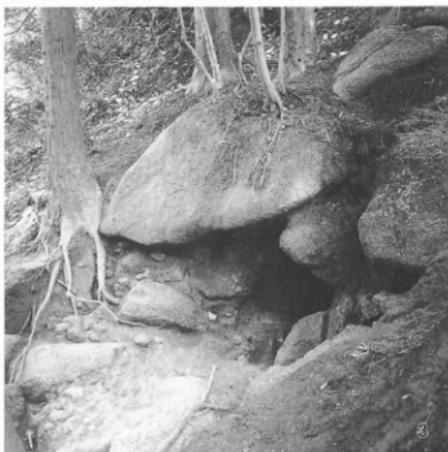
図版12 遺構写真

1: 露岩6、2: 露岩5・6間、3: 露岩7、4: 露岩5・7間、5・6: 露岩8



図版13 遺構写真

1・2：露岩9、3：露岩10、4：露岩5・9・10間、5：露岩5・9間、6：露岩9・10間



図版14 遺構写真

1:岩屋遠景、2:岩屋調査前の状況、3:岩屋完掘状況、4:岩屋前庭部、5・6:岩屋土層堆積状況